

CINEX Web Journal



第14号

発行日 2024年12月1日

★ 異文化間情報連携を踏まえた実験的研究

木村 達洋

★ 日本の英語教育改革が成功しない理由は何か？

市川 研

異文化間情報連携を踏まえた実験的研究

東海大学 木村達洋

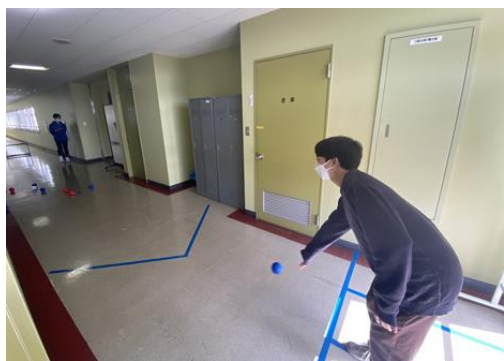
異文化間情報連携学会と初めて聞いた時は、当然、諸外国との関わり方などを中心に議論するものと理解しましたが、よくお話を聞いてみると他の研究分野との交流も含まれるとのことで興味を持ったところです。なぜなら、時を同じくして私の所属する学部が、文系と理系を学際的に学ぶ文理融合学部へと変わりました。実は異文化間情報連携学会とは文理融合と関りが深いのかもしれません。ここでは文理融合で実現した私の研究の1テーマについてお話ししたいと思います。

私を異文化間情報連携学会へ誘って頂いたのは、高頻度で夜の街をご一緒している石井十郎先生でした。東海大学の文理融合学部への改組により同じ学部の教員となったこともあり、何か一つ研究してみようという事になりました。しかし、彼の専門はスポーツビジネス、私の専門は脳波や心電図などの生体計測です。なかなか簡単に研究テーマが見つかるものでもありませんが、彼の研究室にパラリンピックの公式競技でもあるボッチャの用具セットがありました。ボッチャは障害者スポーツとして認識されている面もありますが、老若男女問わず一緒に楽しめる競技です。スポーツ全般に言えることかもしれませんが、スポーツを楽しく行った後の気分の高揚を、自律神経系評価から証明することとしました。スポーツの分野ではアンケート調査が多く取り入れられていますので、客観的な生体データを出せることは有意義であると判断したためです。これが意外にもスムーズに進み学会発表、論文執筆まで終えることができました。

スポーツ分野で生体計測の活用は少なく、生体計測分野ではスポーツを対象とすることが少ない状況にあり、両分野にとって新規性を認められたと感じております。これがまさに文理融合であり、異文化間情報連携学会の目指すものの一つではないかと感じております。

最後に私の近況をご報告しますと、ボッチャの研究を行ったきっかけで、ホースシューズという、これまたマイナースポーツの大会へと出場しました。ホースシューズは馬の蹄鉄を模した競技用のホースシューを 12m 先の棒に 15cm 以内に近づけるように投げる競技で、日本の輪投げにも似ており、アメリカでは非常に多くの競技人口がおります。私はこの大会で準優勝をすることができました。参加者人数は内緒にしておくことにしましょう。

今度はホースシューズを取り入れた研究テーマに取り組めたらよいかと思っています。一度も経験したことのない競技を体験しましたが、これもまた異文化間情報連携と言えるのではないのでしょうか。



簡易コートを利用したボッチャプレイの様子



ホースシューズの投球の様子

日本の英語教育改革が成功しない理由は何か？

豊田工業大学 市川 研

長い間文部科学省は英語教育改革を進めてきました。しかし手間も予算もかけた割には日本人の英語力が向上したというニュースはあまり聞きません。現場の先生方や研究者の方々も懸命に努力をされているのになぜなのでしょう。ひょっとしたら現状維持でも良いのかもしれませんが、また何か大事な視点が欠けている可能性もあるのかもしれませんが。

資源の少ない日本では国際的に活躍できる人材が不可欠なため、彼らに国際共通語である英語力もないと心許ないです。多くの方は高校・大学まで行き英語を学んではいるもののあまり良い成果が聞こえてこないのはなぜでしょうか。日常生活ではあまり英語を使う機会はないので日本人に英語力は必要ないのかもしれませんが。実はもう英語力は十分上がっていてこれ以上の伸びしろはない、もしくは向上していても見えていないだけかもしれません。いずれにしてもこのままでは何も変わらないです。先生方は一生懸命教え研究者たちも様々な教育研究を進めていますが、何か本質的なものが欠けていたり間違っている点があるのかもしれませんが。その探求が私の研究テーマの一つになっています。

いくつかの理由を考えてみましょう。まずは言語学的な理由です。日本語と英語は言語グループで言えば離れていて言わば水と油です。日本人にとって英語は習得が難しい言語で学校教育の授業時間だけではとても足りないのです。さらに最近の英語教育はコミュニケーション重視で、基礎力形成の基盤である読解や聴解を中心としたインプットを重視していません。実際、英語の達人と呼ばれる人々を調査すると、まず読解を徹底的にやっています。本当に日本人の英語力を向上させたいのならば、インプット重視のカリキュラム改革を行い授業時間を増やし、課外でも自主的に学べるような指導も不可欠です。これらの発想が教育政策者や研究者に案外欠けているのが現状だと私は考えています。今まで私はこれらを訴えてきましたがなかなか浸透しません。今後も英語教育界に実証データとともにお伝えしていきたいと思います。

